

自己超越の願望と社会運動

——若者論をめぐって——

市 川 虎 彦

1. ブーム現象としての社会参加

近年、若者層が参加するような抗議行動や自発的な社会的援助活動などの形態やその参加動機に、変化がみられる。このことをめぐって、さまざまな論者が各人各様の解釈をほどこしている。

おもいおこしてみると、社会運動の活動形態が変化したことが、明瞭に認識されたのは、1986年のチェルノブイリ原子力発電所事故後、しばらくして日本でおおきなうねりとなった反原発運動においてではなかったか。この運動には、それまでこうした社会運動の参加経験のない、いわゆる「ふつうの主婦」が参加してきたとされ、旧来の活動家たちやその運動形態が批判の俎上にのせられた。私が実際にみた範囲でも、抗議デモは「パレード」といいかえられ、集会の中心にはコンサートがすえられたりしていた。当時、このあたらしい形態の反原発運動は、「反原発ニューウェーブ」と称された。

1991年の湾岸戦争においては、「勃発から一カ月あまりの間、三大新聞には若者と女性を中心とする投書が殺到した。朝日新聞によればそれは記録破りの量であったという」ような状況が生じた¹⁾。浅羽通明はこの間の事情を、「それまでダサイクライムズカしいと、ノリのよい若者たちに敬遠されてきたシャカイモンダイが、数年前の反原発ブーム以来、突如トレンドイとなり、大学生協で『日本版ニューズウィーク』が知的学生の必須アイテムとして売れ続け、社会派消費者という言葉まで生まれた」と描写する²⁾。

さらに1995年になると、阪神大震災にともなう若者層のボランティア活動がにわかに世間の注目をあびる。おなじ年に薬害エイズの被害者をささえる運動も活発化する。これも、大学生が中心的に活動をになった。

このような運動形態の変化や若者層の社会参加のあり方の変容に関しては、多様な見方が存在する。たとえば栗原彬は、第二次ベビーブーマー（1970—74年生まれ）の社会参加の特徴を以下のように位置づけている。「青年期に達した第二次ベビーブーマーたちは、ロック、マンガ、デザイン、パフォーミング・アーツ、そしてさまざまなクラフトなどへ関心を多様化させつつあり、そうした楽しみ事の延長上に、地域のボランティア活動やネットワーキング、あるいは海外のNGO活動に、気負いなく身を投じることによって、身体と社会参加のリアリティをアクチュアリティ（参加的現実）に換えようとしているように見える」というのである³⁾

このように、あたらしい形の運動形態を肯定的に位置づけていく論者もいる。また、反原発ニューウェーブ以来、一つの運動がもりあがりを見せるたびに、なにかあたらしい社会の変化が到来してきたかのように、それへの期待をよせる論説がくりかえし登場した。たとえば、震災ボランティアに「市民的公共性への関心の芽生え」をみいだしたり⁴⁾、薬害エイズ訴訟支援運動に「日常性のなかに共同性を作って行く新しい運動スタイルがあるのではないだろうか」と期待感をにじませるような議論が⁵⁾、その都度あらわれてくるのである。

しかし、ブームのように活性化した運動は、やがて終息していく。このような現象が、くりかえしあらわれるのは、あたらしい公共性なり共同性なりの芽生えというよりも、なにか別の変容が若者層に生じており、一つのきっかけがあたえられると、それが社会参加へとむかうとかんがえた方がよいのではないか。そのきっかけが、阪神大震災であつたり、薬害エイズ訴訟であつたりしただけなのではないか。それでは、どのような社会心理的な変化が若者層に生じているのであろうか。

この点に関し、これまでの若者の社会参加を論じた議論とはことなる視点を

もつ各論者たちの議論を、それぞれ検討していくことにする。また、各論者の共通点と相違点もあきらかにする。そして、これらの議論がもたらす視点が、社会運動を論じていく際に、どのように有効なのか議論することにする。

- 1) 浅羽通明『天使の王国』幻冬舎文庫, 1997, P. 231。
- 2) 同上, P. 233。
- 3) 栗原彬『人生のドラマトゥルギー』岩波書店, 1994, P. 101。
- 4) 守弘仁志・大野哲夫・城戸秀之・早川洋行・小谷敏・新井克弥・岩佐淳一『情報化のなかの〈私〉』福村出版, 1996, P. 104, 参照。
- 5) 志田昇「新人類と団塊ジュニアの狭間」, 亀山澄生・後藤道夫・中西新太郎・中村行秀編『離脱願望』労働旬報社, 1996, P. 121。

2. 新しい〈まじめ〉

なぜ、保守化し現状肯定的になっているとされる現代の若者層が¹⁾社会参加へとおもむいてくるのであろうか。いつの時代でも、一定層、そういった者がいるという議論もなりたちうる。しかし、たとえば千石保は青少年のボランティア活動に関する調査結果から、現在のボランティアは遊び感覚の「ミーハー」によってささえられている、との知見を提示している²⁾。また、反原発ニューウェーブ以来、実際の参加者自身からも、その観察者からも、「ふつうの主婦」や「ふつうの若者」がになっているのだということが、おりにふれて強調されてきた。それでは、どういった意識の変容が、このような参加者たちの背後に存在しているのであろうか。

90年代の若者を、〈まじめ〉という観点から論じているのが新井克弥である。まず、新井のいう「新しい〈まじめ〉」がどのように成立してきたのか、議論をおっていってみよう。

新井は、「新しい〈まじめ〉」が成立する要因として、戦後民主主義・消費社会化・情報化の3点をあげる。これを、順次おっていこう。

まず、新井における戦後民主主義とは何か。それは、自由、平等、個性の尊

重を理念とするものである。しかし、平等という理念は、日本においては「結果の平等」として理解され、共同体的な「横並び主義」を正当化する機能をはたすようになった。しかし一方で自由と個性の尊重は個性化を奨励し、横並びの平等と矛盾を生じさせるようになる。この葛藤を解消する役割をになったのが、「微小な差異化」の追求という志向であったというのである。

この差異化の追求が全面的に開花したのは、差異化を追求できる程度に日本がゆたかな社会となった80年代である。この差異化欲求に対応して、資本の側からは多様な商品が供給され、消費社会化がすすんだ。すこしずつちがうモノによって、各人の個性が表示されるようになった。

さらに情報化が、個性化志向に拍車をかけたという。情報の獲得が容易になると、人々は自分にあった情報をもとめ、個人の嗜好はかぎりなく多様化・細分化されていく。また物流システムも情報化がすすみ、多品種の商品を消費者に提供する。これら商品への接近が容易となった消費者は、ますます嗜好を多様化させていった。こうして、情報とモノによる個性化が隆盛をほこるようになる。

大量かつ多様な情報は、人をして情報自体を相対化してとらえせしめ、情報への信頼性を低下せしめた。このような質の情報によって形成される社会規範もまた、相対化の道をたどる。それは結局、安定した自己形成基盤の喪失を意味し、自己の相対化をもたらすことになった、と新井はいう。こうして、若者層に相対主義が浸透していった。相対主義とは、「どの立場にも身をおかずに、事象を対象化するとともに、現実足に足を踏み入れることを拒絶する」というような心性をさしていられている³⁾

相対主義の浸透は、90年代にはいって、横並び主義の成立基盤である残存する共同体を完全に侵食していく。共同体と横並び主義の解体は、個性絶対主義へとつきすすむ道をひらく。さらに、個性と自由の尊重は、個人の欲望を最大限に充足させることを是とするミーイズムへと帰結することになる。

一方で、相対主義の下における大量の情報と商品は、選択基準、行動基準を

うしなった人々に不安定な自己をしいることになる。このような状況で、重要な役割をになうべく登場したのがマニュアルである。「マニュアルはシステム社会における自己形成の困難性を解消するさまざまな要素を備えている」と、新井によって位置づけられる。そして現代の若者は、「自己実現にあたってマニュアルに従うことがもっとも最適であり、欲望が満たされることを熟知している」とされる⁴⁾。

マニュアルに従順に行動する若者は、周囲からは<まじめ>にみえる。つまり、「新しい<まじめ>」とは、個性化志向とミーイズムを背景にしたマニュアル従順性によって形成されたものである、ということになる。

以上のような事態がうみだす細分化された社会を、新井は「タコツボ・モザイク社会」とよぶ。それは、「それぞれがマイクロコスモスの中に世界像=小さな物語を見いだすと、その小さな世界に入り込んで、その世界以外の人びとのかかわりを遮断する」というような社会である⁵⁾。

このままタコツボ化が進行すれば、社会は一層細分化され、解体していくのではないかという危惧を、新井はいだく。そこでボランティアが、「タコツボをネットワーク化させる可能性」をもつものとして検討に付されるのである。

タコツボ外とのコミュニケーションが苦手な若者にとって、ボランティアの大義やボランティアによって形成される人間関係は、コミュニケーション回路を限定し、コミュニケーションを容易ならしめるものとなる。また、ボランティアの理念は、個人の恣意的解釈にゆだねられる範囲がおおきく、個人の欲望の最大化と合致するような解釈の仕方も許容されている。さらに、抽象度のたかい理念は、ボランティア参加者相互の連帯をうながす側面をももつ。個々の解釈はばらばらでも、一致した理念のもとに行動しているかのような幻想が生じる余地があるのである。それゆえ、「ボランティアの理念は、個人の欲望を最大化させつつも他者との連帯を、そしてコミュニケーションを可能ならしめる」ということになる⁶⁾。これにくわえて、ボランティアには同様の特性をもつ可能性のある宗教とくらべて、「社会による全面肯定がある」ゆえ、おおくの若者に

とって参加しやすい状況があるというのである。

つまり、近年の若者層のボランティアは、社会貢献よりも自己実現が優先されたものだということである。新井は、震災ボランティアに関して、「若者は震災地という異界で精力的に活動することで日常から脱却し、新たなコミュニケーション手段と、社会性を勝手に確認して、そこから新しい私を発見する」とのべ、「ナルシスティックな自己実現」をはたしていると結論づけている⁷⁾。

新井の議論は、ボランティアへの参加動機に自己実現の欲求や一種のナルシズムをみいだしている。しかし、なぜ若者たちが快適なタコツボにとどまらずにいられないのかは、新井の議論からはさだかにならない。たとえば逆に、天野義智はメディア回線と商品とによってむすばれ、対人的関係を排した自閉的な空間を肯定的にとらえようとしている。天野は、「メディアとの接合は、他者との必要な隔たりを保ちながら、つながるたびに自己をそれまでとは異なるものに変化させる」とのべ、自閉主義とメディアの進化のいきつくところを「労働、家族、死などにさいして、その生は、他者とのじかの関係に対しおおむね閉ざされている（シェルタード・ライフ）。だがそれはメディアを通じて、情報と商品の流れの係留点にもなっている」とえがきだしていく⁸⁾。別の論者からすればユートピアの可能性をもふくむ快適なタコツボから、若者があえてでていく必要性は何なのか。

またここでは、どういう特性をもつ人間が、ボランティアなどにひかれるのかも不分明である。タコツボ化する社会のなかでは、どのような若者もボランティアを希求するのだろうか。そうではあるまい。こうした諸点に説明をあたえる議論を、次に検討していこう。

1) たとえば、原純輔「政治的態度の変容と階層、ジェンダー」、直井優・盛山和夫・間々田孝夫編『日本社会の新潮流』東京大学出版会、1993、参照。

2) 千石保『マサツ回避の世代』PHP 研究所、1994、P. 48～50。

3) 新井克弥「＜私＞はどこへ行くのか」、『情報化のなかの＜私＞』福村出版、1996、P. 166。

4) 同上、P. 182。

- 5) 同上, P. 180。
- 6) 同上, P. 188。
- 7) 同上, P. 190。
- 8) 天野義智『自閉主義のために』新曜社, 1990, P. 197~198。

3. 自己確認と自己陶醉

浅羽通明は、湾岸戦争を契機に三大新聞の投書欄によせられ、掲載された四百通あまりの投書を分析しつつ、この若者層の変化をさぐっていつている。まず、投書を通覧してみると、そこには「ナルシスティックな感情の吐露」「自分の意見への確信」「無私で高邁な正義感」がみちているという¹⁾。それと対照的に、おなじ投書のなかでかたられる「いま、わたしたちにもできること」のほとんどすべてが、あまりにもたわいなく、早期停戦や被害者救済になんの役にもたたないものばかりであったとする。

浅羽によれば、これらの投書に共通してみられるのは、「日常性」から乖離した問題意識と「実効性」ととぼしい提言、ということになる。この日常の生活からはなれたところで社会問題に関心をよせるという心性は、反原発ニューウェーブ以降、人々の関心を持続的にひいてきた「地球環境問題」においても同様といえる。

そして、実効性のない行動を提言したり、あるいはそれに参加したり、またそもそも実効性のない新聞投書で世間にむけて発言したりという、これらの行為すべてにみられる特徴は、そうした行為をしている自分自身に対する「ナルシスティックな自己陶醉」である。あるいは「アイデンティティの確認」である²⁾。

では、なぜ今の時代に、ゆたかでみちたりているかのようにみえる若者層が、よりによって社会参加を欲することによって、自己陶醉したりアイデンティティの確認をおこなったりする必要があるのだろうか。この点を浅羽は、戦後民主主義の呪縛と高度消費社会および情報化社会の到来ということから説明し

ようとする。ここで想定されている三つの要因は、前の新井克弥が議論のくみたてにつかっている要件と同一といってさしつかえない。だが、当然のことながら、それぞれの術語が意味する内容や力点のおき場所はことなり、それを持ちいての議論の構成は別物となっている。

まず第一に、浅羽のいう戦後民主主義とは、どのようなものか。彼は、以下のような良識が根幹となつてなりたっている価値体系であるとする。すなわち、「たとえば搾取する者される者といったかたちで『遠方の不幸』とつながっている可能性があるという『社会科学的』思考」、「政府や一部の者が社会を誤った方向へ動かす危険を、我々民衆が絶えず監視し阻止すべきだという『民主主義的』思考」、「日本じゅう世界じゅうの人々は私たちと同じ人間であり、人間は皆人間らしい生活を営む権利を有するという『ヒューマンイズムの』思考」などである³⁾。こうしたイデオロギーを、戦後の日本人は学校のなかで日夜すりこまれてきたというのである。

しかし、この戦後民主主義なるイデオロギーは、浅羽にいわせれば「人々の善く生きたいという欲求を、微温な生活を保守したいという矮小な生身のエゴイズムから切り離したところで観念的にのみ満足させてきた」ということになる⁴⁾。高度成長期、人々がよりゆたかな生活をめざしてはたらき、所得の向上と生活の利便の増大に満足感をえていた時代には、観念的な戦後民主主義が人々の心の空隙につけいることは不可能であった。この時代にあつて、教員やジャーナリストが奉じる戦後民主主義に簡単に伝染したのは、亜インテリとしての学生のみであつたと、浅羽はのべる。高度成長期にみられた、学生運動のもりあがりとは、こうした構造からうまれたものだとする。

経済成長の結果、ゆたかな社会が一応の実現をみた80年代初頭には、若者層はそのゆたかな消費生活を享受しており、しかも「現在ほど等身大のエゴイスティックな自分を恥じていなかった」と、浅羽はみる⁵⁾。むしろ学生運動は沈滞し、この世代の「若者たちは、この到来した高度消費社会の尖兵となつて『おもしろいことについての情報』を発見することを競いあ」う、というような状

況が出現する⁶⁾

しかし、この高度消費社会の成立が、あたらしい社会派をうみだしていく源泉ともなるのである。個の欲望を追求しようとした若者たちの前に、今度は資本の側からおびただしい量の欲望を刺激する情報が提供されるようになる。すると逆に、欲望が、商品やその情報によって喚起され、日常生活の現実感が縮小していくような転倒した社会になる。「海外旅行もおしゃれな恋愛も、みながしているから、それが人並みだから、という強迫観念に急かされて義務的に楽しめる時代」となるのである⁷⁾

新井は情報化と消費社会化が、それぞれの多様な嗜好をはぐくみ、それに応じた細分化された社会をもたらすとした。これに対して浅羽は、情報化や消費社会化の進展によって、逆に個の欲望が社会の側から喚起され水路づけられるとかんがえたわけである。彼は、「個の欲望は、一般化し社会化しついに公共化したのだ。かくして個の欲望の衰退の極限で、マクロな問題への関心がトレンドとなった」といい、「マクロな問題への関心へ彼らを駆り立てているのは、もはやインテリの手持ちぶさたではない。それと同じくらい強烈になった消費への欲求、それも個の欲望が衰弱した後、一般的社会的にその方向が規定されるようになった消費欲求こそがネオ社会派の背景なのである」というのである⁸⁾

つまり、「海外旅行やおしゃれな恋愛」に対する需要が個の外部から喚起されるように、マクロな問題への関心も外部から流行としてやってくるというのである。このことに関連して、大塚英志が「癒しとしての消費」という概念を提示している。大塚は、人々がもはや80年代の＜差異化＞という消費パラダイムにしたがうことにつかれていると主張する。そこで90年代の消費パラダイムとしてうかびあがってきているのが＜癒し＞だというのである。＜癒し＞の方向は二つあり、一つは自分自身の＜癒し＞（たとえば入浴剤、人格改造セミナー、カウンセリング）である。もう一つは、他者の＜癒し＞である。こうした文脈の中に「地球にやさしい」エコロジー消費があり、今後ボランティア消費が流行する可能性がたかいたと大塚は予測していた。このようにエコロジーもボラン

ティアも、企業主導の消費潮流として存在しているというわけである⁹⁾

こうしたマクロな問題関心に若者層がひきよせられていく心理的な背景には、「等身大の自分についての自信のなさ」がある、と浅羽はいう。すなわち、「せせこましい日常を生きている矮小なエゴイストである自分を恥じ、そんな実像を隠蔽して一気に尊厳ある個人へと自分を上げ底しようとして生じた空隙」を、マクロな問題関心、ひいては戦後民主主義がつくというのである¹⁰⁾

80年代の若者のようには、「矮小なエゴイスト」である自分を現代の若者がうけいれられないのは、消費社会化と情報化の進展とともに、より高度化した学歴社会のなかで、学校空間以外で共同の規則にもとづく仲間社会とそこにおける自分の居場所を措定するという機会をえずに、自意識を肥大化させたまま成長するものがふえているということもある。こうしたことが、若者をして自己確認と自己陶醉の場へとむかわしめるというわけである。

以上のように浅羽の議論は、新井の議論ではあきらかではなかったことが討議され、一定の解釈がほどこされている。次にもう一つ、社会参加に、日常生活のなかのかがやかない自己からの超越という動機や契機を見る議論をみてみることにする。

- 1) 浅羽通明『天使の王国』幻冬舎文庫、1997、P. 238.
- 2) 同上、P. 242.
- 3) 同上、P. 263～264.
- 4) 同上、P. 299.
- 5) 同上、P. 268. 以下、1980年におこった、徴兵制とウォークマン（に象徴される快適な日常）をめぐる議論によって、この時代の若者層の心性を論じている。
- 6) 同上、P. 276.
- 7) 同上、P. 278.
- 8) 同上、P. 278～279.
- 9) 大塚英志『＜癒し＞としての消費』勁草書房、1991、P. 300～306.
- 10) 浅羽通明、前掲書、P. 267.

4. 核戦争後の共同性

宮台真司も浅羽通明とおなじように、70年代後半から80年代前半に、若者が私的な消費生活を享受していたとの認識をしめす。すなわち、「前世代の『非等身大の輝かしさ＝革命幻想！』を生きられなくなった若き新人類世代は、その代替物として、『等身大の輝かしさ＝異性との戯れ』を見出していく」というわけである¹⁾

宮台は、この80年代に二つの終末観があったと主張する。これが、よくしられることとなった「終わらない日常」と「核戦争後の共同性」である。「終わらない日常」とは、輝かしい進歩もおぞましい破滅もなく、ただ退屈で平凡な日常が永遠に反復されるという感覚をさしていられている。「核戦争後の共同性」では、こうした日常のなかではありえない「非日常的な外部」が志向され、「廃墟の動乱のなかでの団結や共同性」が夢想される。「終わらない日常」は、80年代前半、女の子を中心に育まれた終末観であり、「核戦争後の共同性」は、それに対抗するかのように80年代後半、男の子を中心に主流になった終末観であると、位置づけられる。

宮台は、「終わらない日常」のなかで、「等身大の輝き」をえられなかった人間たちが、「核戦争後の共同性」というサブカルチャーに逃避し、また一方で宗教ブームをなりたたせていったというのである。

こうした文脈のなかで宮台は、震災ボランティアを、「終わらない日常」をきつuitと感じているものたちが「核戦争後の共同性」という夢を現実化したものだとして指摘する。「ボランティア精神にめざめたのなら、震災ボランティアが終わっても、東京なら東京という地元でボランティア活動に熱くなれるはずである。ところがそんな学生はまずいない」といい、かれらは「『震災の廃墟』を『鏡』として自分自身の輪郭を取り戻そう」としているのだとする²⁾

「輝かしい未来」に裏切られ、「終わらない日常」からの離脱をもとめたものが、震災ボランティアたちであり、そして宮台のこの議論の中心となっている

オウム真理教に入信した青年たちだということになる。そうすると、退屈な日常の反復からの超越を願望する若者は、「等身大の輝き」を手にいれられなかった「モテないやつ」「さえないやつ」ということにもなりかねない。この点は議論の余地がある。これについて、たとえば小浜逸郎の議論を参照してみよう。

全共闘運動とオウム真理教を比較して論じた小浜逸郎は、現実に対する超越志向をつよくもつ知的青年たちを、理想主義的観念にひかれやすいものとしてとらえる。ゆえに、「大正期の白樺派、戦前の左翼青年、昭和の二・二六青年将校、全共闘学生などと共通した傾向をオウムの青年たちもしめしている」とする。しかし現代は、経済成長の結果、理想主義的な若者たちに対し、「『社会変革』というかたちでの情熱の受け皿」を用意してやることができなくなった時代である³⁾。これは、70年代後半には「革命幻想」が消失したとする宮台の認識と共通している。

くわえて小浜は、「個体の不遇感は、純粹に個体の問題に塗り込められる以外に普遍的な理路を見いだせなくなってしまった」とのべる。宮台も、不幸の原因が外的制約（たとえば貧困や病気）から内的制約へ移行したとする。「終わらない日常」とは、「幸せや不幸の原因が『外的制約』に帰属できなくなり、ひたすらコミュニケーションの失敗による『内的制約』ばかりが問題となるような社会」なのである⁴⁾。こうして理想主義的な超越志向は、自己の「身体」や精神世界へとおもむかざるをえなくなると、小浜はいう。

以上のように、小浜の議論と宮台の議論は、変革の理念の消失という認識や、その結果超越志向が自己の身体や精神にむかうとする点で一致している。しかし、日常からの超越を志向するものが、宮台にあっては「終わらない日常」をきつく感じるものとしてかんがえられ、小浜にあっては知的な青年層と想定されている。浅羽は、自意識を肥大化させたものととらえ、どちらかといえば小浜のかんがえにちかい。しかし浅羽は、小浜のようにどの時代にも一定層いたものというとらえ方を排し、現代社会特有の構造が多くの超越志向の若者をうんでいるとかんがえているといっている。こうした差異もふくめて次に、

従来の若者の社会参加を論じた議論とはことなるあたらしい型の議論の比較検討をつうじて、そこからどのような認識がひらけるのか考察してみたい。

- 1) 宮台真司『終わりなき日常を生きろ』筑摩書房, 1995, P. 156.
- 2) 同上, P. 94~95.
- 3) 小浜逸郎『オウムと全共闘』草思社, 1995, P. 181.
- 4) 宮台真司, 前掲書, P. 159.

5. ま と め—日常と社会参加

ここまで、新井克弥・浅羽通明・宮台真司の三者の議論を通覧してきた。90年代にはいって、社会参加やボランティアにひきつけられる若者層があらわれたのはなぜか。かれらの特徴は何か。また、60年代の全共闘運動などとは、どこがちがうのか。あらためて三者の議論をまとめてみたい。

まず第一に、それぞれいい方はことなれど、共通する認識は、現代の若者にあつては社会変革の理念が消失したということである。宮台のいい方をすれば「非等身大の輝かしさ」の消失である。浅羽は、「戦後、特に60年安保直後、日米安保の下での経済成長か、それとも清貧覚悟の非武装中立かが問われたとき以来、文系知識人は御用済みになった。この時、日本国民の圧倒的多数は前者を掲げる池田隼人内閣を支持した」といい、すでに60年代から知識人の掲げる「理念——多くはマルクス主義」が一般国民と乖離していたことを指摘する¹⁾。相対主義の浸透を強調する新井においても、この認識は共有されているといつてよい。

全共闘運動は「非等身大の輝かしさ」に若者層が身をゆだねられた時期に成立したものであつた。浅羽にいわせれば、社会における実務を経験していない亜インテリたる学生のみが、知識人の掲げる「理念」に感染したのだということになる。

ゆえに、「理念」が消失してしまった後の社会参加は、60年代の学生運動とは

ことなる社会的背景や心理構造から生ずるはずである。そこで、若者層の参加動機の根幹に、退屈な日常生活の反復からの脱出という意図がある、という第二の指摘が共通してなされることになる。社会変革の理念ではなく、自己変革の願望から社会参加がはかられているというのである。

新井は、「ボランティアで輝いている<私>は、以前の<私>より、個性的な、バージョンアップした<私>なのだ」とのべる。宮台は、そこに「終わらない日常」からの自由をみる。浅羽は、「何らかの社会運動に参加することで、そうした特別な運動に加わっている自分、普通の俗人と違う自分、正義の側にいる自分を獲得して、それを自己のプライドの源泉としてゆくタイプがけっこう見られる」との見解をしめす²⁾。卑俗な日常生活をいきる矮小な自分をひきうけることができないような自意識を肥大させたものが、自分を「上げ底」する道具として社会参加があるというのである。

こうした議論は、若者層の社会参加に、社会的な意味や未来への希望を託すような議論をしてきた論者たちと、対立するものである。あまりにも否定的なとらえ方だとの見方もできよう。しかし、自己実現を希求する若者層の存在が、ブームのようにあらわれてはきえていく社会参加の波をささえているというのは、妥当な論議であろう。参加の主題やそれをささえるイデオロギーとは無縁のところ、動機が存在しているのである。

では三者は、以上のような現実認識から、どのようなことを主張しているのだろうか。新井は前にものべたように、ボランティアを自己実現の欲求に発するものとしつつも、タコツボをネットワーク化する可能性をもつものとして評価もする。それゆえボランティアに関しては、「個人の欲望を最大化させる活動が社会貢献となれば、個人にとっても社会にとっても好都合と考えるべきではなかろうか」とものべている。しかし、震災ボランティアは持続性の点で問題点があったとする。そこで新井は、ボランティアの延長線上に、個人の欲望と社会の利益が交錯するところに形成されるあたらしい理想的なシステムの雛形として、ディズニーランドを提示するのである³⁾。

ディズニーランドでは、ボランティアとおなじようにコミュニケーションが易化し、欲望は最大化され、自己実現をはたすことが可能となるとし、それだけではなく企業側も利益をうる上に、システムとしての持続性も維持されるというのである。ここにいたって、タコツボ化・細分化する社会を統合するモデルが、低賃金のサービス労働に「やりがい」をもたせるための巧緻な企業側の労務管理マニュアルにいきついてしまうのである。

これに対して、宮台・浅羽は、日常のなかにもどることを主張する。なかでも宮台は、「核戦争後の共同性」という終末観や「終わらない日常」の外部を志向するものたちを、「終わらない日常」をたえていきる知恵をしらないと否定する。「『永久に輝きを失った世界』のなかで、『将来にわたって輝くことのありえない自分』を抱えながら、そこそこ腐らずに『まったりと』生きていくこと。そんなふうに生きられる知恵を見つけることこそが、必要なのではないか」といい⁴⁾、そのような知恵を具体的にもって実践しているものたちとして、ブルセラ世代の若者たちをあげる。

この宮台の示唆に、浅羽は疑問をなげかけている。クラブキッズやデートクラブの女子高生は、「要するにどの世代にもさまざまなかたちで遍在したフツウのあんちゃんやねえちゃんであって、何も『終わらない日常』を生きるスキルなどと気取って呼ばなくとも、知がせりあげたプライドなど端から縁のない彼らは、憂き世を笑って愚痴って笑って突き放して諦めておもしろおかしくいいかげんにやり過ごしてあたりまえなのだ」というのである⁵⁾。

宮台の議論には、「終わらない日常」を生きるのをきついと感じる新人類世代と、それをいきる知恵を身につけたブルセラ世代、という世代論がかいま見える。浅羽の場合は、知的なゆえに自意識を肥大化させた人間と、そのようなものに最初から縁もゆかりもない人間は、いつの時代にもいたとの認識がある。ただし、情報化と学歴社会化の進展、受験競争の一般化は、前者のような人間をふやしているというのである。これは、世代論でわりきる論法よりも、浅羽の議論の方が説得力をもつ。

では浅羽は、どのような結論を提示しているのでしょうか。彼は、若者は「『生涯』というタイムスパンの中で、現在はまだ非力な自分がその非力を補おうとコネクションや技術や情報や財産や何やらを育て上げ、少しずつ力をつけてゆく」べきだ⁶⁾といい、そうして身につけた職能や地位に応じて、自分のかかわる部署において適切な発言と貢献をしていくべきだということになる。

冒頭に紹介した栗原彬や志田昇からすれば、この浅羽の議論は、あまりにも保守的だということになるにちがいない⁷⁾。しかし、ここまで検討してきた論者たちの若者論をかんがえにいければ、これまでの若者の社会参加を論じる議論が、論者の願望や期待が投影された、過剰に意味付与されたものだったということがいえるだろう。

情報化や消費社会化が、退屈なゆたかさに満足できない層をうみ、それが社会参加の培養基となっているという議論は、これから考慮にいれていくべき説明であろう。実際、反原発ニューウェーブ以降の市民運動のもりあがり、高学歴の主婦と学生におうところがおおきかったといえる。これら二つの層は、労働社会の周縁にあって社会の実務がまぬがれる一方で、さまざまな情報に接する余裕にめぐまれている。まさにメルッチが「豊かなマージナル」⁸⁾と称した状態にあるといえる。

「終わらない日常」をきつuitとを感じるの心性は、主婦にもあるといえる。社会参加が、今の自分とはことなる自分をもたらすという構造は、若者とおなじである。しかし主婦層においては、主婦的状况からの発言や運動も存在し、日常生活のといなおしという契機がそこにはられることもある。若者層の場合、日常性から切断されたところで、社会参加が志向されているというのが、これまでの三者の指摘であった。

志田がのべるように、雇用不安が若者層に日常性のなかでの共同性をもたらすという可能性も、まったくないとはいえない⁹⁾が、逆に競争社会のなかをいきてきたものにとっては、日常的な課題における共同性の構築が困難で、超越的な理念にもとづく共同性の方がより志向されやすい、ということもかんがえら

れうる。いずれにせよ、情報化や消費社会化の中で、若者層が社会運動・社会参加の一つの興味ぶかい源泉として存在していくとかがえられるのである。

- 1) 浅羽, 前掲書, P. 260.
- 2) 小林よしのり『新ゴーマニズム宣言スペシャル 脱正義論』幻冬舎, 1996, P. 201.
- 3) 新井克弥, 前掲論文, P. 191~193.
- 4) 宮台真司, 前掲書, P. 170.
- 5) 浅羽通明『思想家志願』幻冬舎, 1995, P. 50.
- 6) 浅羽通明『天使の天国』, P. 297.
- 7) 実際, 志田昇は薬害エイズ訴訟支援運動について, 学生たちに「日常へ復帰せよ」とよびかけた小林よしのり(小林よしのり, 前掲書, 参照)を念頭に, 「自分の足で軽やかに歩きだした若者たちは, たとえ小林よしのり氏が止めても, もう止まらないだろう」と論文をしめくくっている(志田昇, 前掲論文, P. 122)。
- 8) アルベルト=メルッチ『現在に生きる遊牧民』岩波書店, 1997, P. 56.
- 9) 志田昇, 前掲論文, 参照。

(本稿は, 平成8年度松山大学特別研究助成金による研究成果の一部である。)